

ぶらっとサロン椿通信 令和4年6月号

今号の椿:ヒットパレード

R3.3.24 撮影



報告:有楽齋

毎週火曜日の午後1時過ぎから午後4時半ごろまで、朝日2丁目集会所で「健康麻雀ミーティング」をワイワイガヤガヤとやっていたのですが、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、一昨年3月10日から自粛し**現在休局中**です。

日本はツバキの北限の国

地球上で野生のツバキの仲間(ツバキ属)は現在250余种知られており、わが国にはヤブツバキ、ユキツバキ(ユキバタツバキを含む)、サザンカ、ヒメサザンカの4種がある。ツバキ属は東~東南アジアの固有種で照葉樹林の代表種とされ、その分布は日本を北限とし、南は中国の長江以南からインドシナ半島、西はネパール、ブータンに及び。

色分け花図鑑 椿 桐野 秋豊/株学習研究社より抜粋しました。(有楽齋)



左から日本の原種椿
ヤブツバキ(原種)
ユキツバキ(原種)
サザンカ(原種)
ヒメサザンカ(原種)

中国の南から南西部には200種をこえる種類が知られており、この地帯がツバキ属の分化・発生の中心地と考えられている。しかし、ここより南西部になると種類は減少し、ブータン、シッキム、ネパールでは各1種となり、チャヤそれに近い種に限られる。また、分布図で青く示した南東部の島々には、白花で花径2.5cmの原始的なツバキ・ランケオラータがただ1種自生するのみである。



ランケオラータ *Camellia lanceolata*



唐椿 *Camellia reticulata*

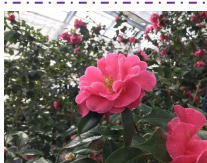
ツバキ属の生育環境は温暖多雨を好むため地域的に乾期と雨期に分かれるベトナムなどでは、長い乾期(11~4月)間にも海の水温差により発生する空中湿度が届く地域(適潤地)でないと生育できない。また土壌の性質では、日本産の原種ではいずれも酸性土壌(pH5~6前後)を好むが、中国の南~南西部からベトナム北部にかけての石灰岩山地に自生するものは、アルカリ土壌(pH8前後)を好むものが多い。

ツバキ属の園芸化については、日本では室町時代から茶の湯の発展とともにツバキが愛好され、江戸時代には多くの品種分化をとげ、遠くヨーロッパへもその原種や品種は伝播されている。一方、中国は原種数では最大の遺伝資源をもつ。しかし、600年代の隋、唐時代から1950年ごろまでの長い間、中国で園芸化されたツバキ属はトウツバキ1種のみで、その品種数は数十種にすぎない。多種の多くは、もっぱら食用油資源として栽培されてきた。



フラバ *Camellia flava*

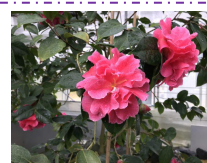
1956年以来、中国南西部で黄花の原種が20余种も発見されたことなどがきっかけで、近年は関心が高まり、各都市で国際ツバキ大会が開かれ、研究も進展している。また、ベトナムでは、仏領インドシナ時代の1910年には黄花のフラバが発表されたが、長い戦乱で研究が中断し、1966年に再発見された。以後ツバキ属の真空地帯といわれたベトナムで調査が進み、紅花2、黄花17を含む27種の原種が発表された。



麻葉銀紅 ayeyin hong



楚雄茶 chu xiong cha



色奔 se-ben

富山県中央植物園には日本国内では珍しい、トウツバキ(*Camellia reticulata* Lindl.)の温室があります。トウツバキは中国の雲南地方が原産のツバキで、原種はごく普通の一重紅色の花ですが、そこから生まれた園芸品種は大型で紅色八重咲きのとても華やかです。立ち上がる形状の花弁は兎耳弁と呼ばれ約20種集められています。